明治三十一年十月十日

女學雜誌

第四百七十三號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百七十三號目次

◎社説
家庭訓に於ける忠の一字
當今女學の短所
女學生の話[illegible]を[illegible]す
◎家庭
[illegible]
[illegible]
[illegible]の女[illegible]
◎史傳
[illegible]
◎文叢
[illegible]
[illegible]
◎雜錄
[illegible]
[illegible]
◎閨秀[illegible]
[illegible]
[illegible]
◎時文
◎片々
◎時報

社告

本誌は毎月二回[illegible]十日、二十五日の兩日に[illegible] [illegible]

◎女學雜誌定價表◎

[illegible]	一冊	[illegible]
[illegible]	半年分	[illegible]
[illegible]	一年分	[illegible]
廣告	一行(廿[illegible]字)一回	[illegible]
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

[illegible]

明治二十[illegible]年[illegible]月[illegible]日[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
東京市[illegible]

社告

櫻井成明君譯
腓立比物語 定價[illegible]十八錢
[illegible]山[illegible]明君著
婚姻論 定價[illegible]十二錢
[illegible]著
淺瀬の波 第一[illegible]
[illegible]文集
[illegible]志了 定價[illegible]
[illegible]
我黨の女子教育 [illegible]
[illegible]
百人一首[illegible] [illegible]
同
女訓[illegible] [illegible]

女學雜誌社

女學雜誌
第四百七拾三號
明治三十一年十月十四日發兌

社說

家庭訓に於ける忘の一字

◎數年前、記臆術の教授を揚言する人があつて、其の頃、一時の大評判であつた。成程、物を善く覺えると云ふことは、大相の利益に相違ないが、亦、忘れると云ふことも一つの利益であることを忘れては成らぬ。若し人間に忘れると云ふことが無かりしならば、隨分と迷惑のものであらふ。煙草を忘れ草と稱して珍重するも同樣の譯で、たゞ忘れたい〳〵と希望することも、世の中には多くあるのである。左れば、覺えて居ることが仕合せの事もあり、忘れて仕舞ふのが、幸はいの事もある。天、巧みに此の二つの性質を賦與して、明暗黑白の二本の糸を賜はり、之を糾なつて人生の表裏を造らせ玉ふ御攝理は、如何にも感謝に堪へぬことである。

◎智慧の發達などは、總べて物覺えで出來るものゝように考へる人もあるが、決して左樣でない。忘れて仕舞ふほどでなくては、眞の智慧が熟さぬこともある。彼の記臆力の洪大なる俊才が、存外、鈍物となつて仕舞ふのは、活才と云ふものを欠くからであるが、其活才を欠く所以の理由を考へるに、一々學習した事柄も忘れて仕舞ふほどに、自分から發起創造する癖をつけぬからである。

◎中にも、小學年代の子供などは、覺えて居ると云ふよりも寧ろ忘れて仕舞ふほどに發達する方が善いのである。何を教へられたと云ふ智識の痕跡は全たく消え失せても構はぬ。實地に其の知力、智能を開發して、他日自から眞理を感受し、研究するに効力あるものとなれば善いのである。夫には、記臆すると云ふことを第一とさせてはならぬ。寧ろ忘れさせても構はぬと云ふ方針で、或る時は忘れさせる積りで、只管ら實地の活力を熟さする工夫に導びかねば成らぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎一體、忘れると云ふヿにも色々あつて、丸るで忘却消滅して、永久之を再現するヿが無いと云ふような忘れ方は、あまり無いヿである。苟くも一と度び良能に刻ざみつけた事は、何かの場合に再たび現はれるものである。之が吾が意識の表てに感ずるほどに再現せぬとしても、是非夫相應の影響を及ぼすほどに再現するものである。ソコデ、再現しても、意識の表てに現われぬと云ふほどなるは、餘程十分に人の活力に潜入つて居るのである。再現するときに、意識の表に感ぜられるのは、所以ゆる、思ひ出し、追懐などと云つて、昔しを忍ぶ時などの情感であるが、之は可成り十分に人の活力に這入つては居るが、其の昔し特別の出來事と伴なつて、當時格別に感情を刺激したヿがあるのである。然し、平生は之を忘れて居ると云ふのが、至極健全な證據で、畢竟、其人の仕合せになつて居るものである。之に反し、いつでも忘るゝとなく、つねに覺えて居ると云ふようなる事柄は、智識にせよ、經歷にせよ、其人にとつてあまり健全なる記憶とは云われぬ。なれば、十分なる記憶は寧ろ忘れるにあるほどで、忘れると云ふヿは、決して記憶と相ひ戾する者では無いのである。

◎以上、智慧學問の事に付いて申してさへ斯の通りの道理であるが、家庭の習慣、教訓、薫化などと云ふものは、特更ら『忘れる』と云ふ一語を大切の標準にせねば成らぬ。家庭内の事を、覺えて居ると云ふほどの關係で覺へては爲にならぬ。忘れて居ると云ふほどの關係で覺へねば成らぬのである。然るに、當今の教育は惣じて學風を誤まつて居るが、家庭の内でも矢張り同臭味に化せられ、兎角、覺へさせよう〳〵とする誤解がある。家庭の薫感化を誤らすものは、即わち此の誤解である。

◎總べて、仁義忠孝の何れの德を問はず、之が仁である、之が義であると云ふような感覺で行ふときは、既でに其の德の美質を失なつて居る。行ふものは、仁義の仁義たるを忘れ、殆んど仁義の名さへ忘れて居るようでなくては、眞の仁義では無いのである。家庭に於ける孝行も即わち夫れで、孝行を盡すなどと感じつゝあるものに、孝子は無い筈である。親は、慈愛の文字を忘れ、妻は貞節の標を忘れ、子は孝行の名を忘れて居らねば成らぬ。苟くも此等道義の名が念頭に浮んで、自分の家庭内で、一トツ之を行なつて見ようなどゝ云ふよう

な時には、既に家庭に幾分の破綻、波瀾が生じて居ると思わねば成らぬ。圓熟して、ちとのスキマもなく、所謂ゆる水のさし所ろの無いと云ふような家庭には、親も、妻も、子も殆んど道徳と云ふとを忘れて居るのである。

◎左れば、親が其子に躾をつけるには、其の記臆力に痕跡をのこすようなる敎へ方は、至極、嫌ふべきとである。其の身體がノンビリと伸びて、何んの跡方を遺さぬと同様に、其の情感、品德にも、何等の僻、何等の片よりも遺さぬように育て上げねば成らぬ。夫には、叱られたとも、敎へられたとも、賞められたとも、總べて忘れて仕舞ひ、又た其の生命たり活力たる本躰の品操の上に、生ける連續したる德化の遺るようにと工夫せねば成らぬ。此のようなる德化の能く行はれたりや否やを試驗する標準は、其子が家庭の敎訓を能く覺へて居るか居ぬかと云ふとで直に分るのである。所云ゆる忘れるが如くに覺えて居るか、もしくは覺へたる狀にて覺へて居るかと云ふとで分るのである。

◎他人の仲で揉まれ〳〵て育ちしもの、若くは繼父繼母の下で躾せられたるものを見よ。如何にも、麗々しく、万事、キチヤウメンに、殆んど手落なきかの如く、物事を處置する。俗眼によつて評すれば、其躾方太はだ宜しく、心掛方の如何にも殊勝なる如く見ゆると雖ども、識者は決して之を賞美すまじ。識者の賞美せざるのみならず、彼等には一種の雅致風味を欠きて、他の温生の子が直ちに覺とり得べき美感を受くる事の甚はだ難きとを發見するであらふ。所詮は、人として最も大切なる情操を欠乏するとを見すに相違ないのである。家庭の訓化に於て、至極不出來なものと云ふて宜しいのである。

◎凡そ、温かに調のひ、圓るく熟したる家庭に於ての感化は、前申したる知く、總べて、道義の名を忘れしめ、其の經驗を忘れしめ、其の敎訓を忘れしめるようなるものであるが、一と度び、家を出でて、世の風波にもまれ、俄然として變化せる狀態に遭遇する時にわたつて、其折々に昔しを追懷し、當時を忍び、可云ゆる意識に再現するの記臆を思ひ起すともあり、又は左なくとも、無意識の再現を促がして、其折々の慰藉を自然に感發するものである。其邊、鋭どく、ゆかしき心意の狀態は、彼の食客そだち、もしくは、繼子そだちの徒な

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

どが多く得るとかたき美觀である。

◎今日の教育は兎角、名聞的教育に流れて居る。所謂ゆる演說して、主義とか、道義とか云ふものを吹込むのである。教へられたものが、忠君、愛國、孝子、節婦などの美談を終始念頭に浮べて居れば、夫が教化が行はれたように思ふて居るのである。家庭の教育にも矢張り此の弊を受けて、親が其子に教へるとに迄で、此の物質へ主義、商說聘聞主義、コマシヤクレ主義を善いとのように思ふの弊がある。偽善、偏狂、矯激などと云ふものは之から起るのである。左なくとも、圓滿に圓熟したる人物は決して之からは起らぬのである。家庭の最上の感化は、家庭訓を忘れるやうにあらせるのである。家庭に於ては、其子に忘れさう〃と云ふ一關を忘れぬようにせねば成らぬよでである。

絶聖棄智、民利百倍、絶仁棄義、民復孝慈

絶巧棄利、盗賊無有、見素抱樸、少私寡欲

當今女學の短所

女學生の活智を育せず

◎所謂ゆる高等女學校全盛の時代で、所々に多くの女學校が出來、之に入學する女生は、溢るゝが如くである。其の教師も、其父兄も、共もに女生の教育に心掛けて來たやうで、四五年前の殺風景とは違つて居る。之れ先づ祝すべきとに相違ないが、其の女生教育の觀念が、依然として正鵠を失なつて居るは、嘆くべきとである。

◎凡そ、今の女生教育の目的は、「飾る」にあると云ふても宜しいほどである。即はち、人の見た時に如何であらうか、世の流行に對して違ひはせぬか、女としての嗜み、躾けに申分はないかと云ふの類で、徹頭徹尾、人の見る目に對しての心得方を教ゆるに止まつて居る。即わち之れ一種の化粧で、詮ずる所ろ、裝はひ飾りの伎倆を與ふると云ふに過ぎぬ。假たま高尚氣なる女訓なきにあらねど、其の基づく所ろを究むれば、矢張り、人より惡るく言われぬようにとの用心から出て

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

居るので、直ちに道その物、德その物、智慧その物に就いての必要から女生教育を主張する人は極めて稀である。

◎本來、女は女として人生に無る可らざるもので、決して他の副産物では無い。女は女としての天職あり、特色あるもので、單に外の必要物の介添となるべきものではない。故に、女が女として爲さゞる可らざる一種の事業あることゆへ、夫を遂行する丈けの智德人品を實際に具へねば成らぬ。此の爲に女學を要し教育を要するのであるから、女生教育の目的は、第一に主として此の目的に適わねば成らぬ。美を發揮し、美を維持するも亦た女の役目で、特に、柔道を守るは女の天禀ゆへ、女は女らしく柔順に、且つ、修飾的、美妙的たらんとは無論吾人の均しく所望して止まざる所なれども、其の實地の伎倆品德を所持して、自から其天分を實行し得る丈けの價値が具わらねば、只主として裝ほふとの一方のみが長じたりとも益ないとである。

◎世の批評に對して不都合なく所措せしむると云ふとを主意とする時は、『飾』の一字に歸する。其の天職に對して不都合なく實行せしむると云ふとを主意とする時は、『實力』の二字に歸する。方針の立て方で、教育の手心は自づと違ふもので、末には存外の懸隔を生ずるものである。『飾』の一字を綱にする時は、自づから形式を大切にして、只だ暗誦、記臆などを專らにするようになる。『實力』の二字を主とする時は、自づから精神を大切にして、工夫、研究、修練、活用などを心掛けるようになる。例へば、女學校にあつて僅かに四五年の教育を受ける間にても、女生の心の持ち方が、此の二道の何れに向ふかに隨つて、其將來に非常の相違を來すものであるが、其の根本は必竟、教ゆる人の方針如何、教授の手心如何によつて分れるのである。

◎家に在つて良人に内助し、若くは複雑なる家政を處理し、連續せる家門の交際を滑らかにするとなど、惣べて中々の智惠と伎倆とを要するとは勿論であるが、假りに子を育つると云ふの一事に就いて考へても、如何に多くの活智活才を要するかを想像するとが出來よふ。育兒學もしくは教育學などと號して、一と通りの學科を學ぶことはすれども、それは、ホンノ、手ほどきである。彌よ實地に子供を扱かひ、其の活ける身躰頭腦を預かり、母の手心一つに、生殺の權を握り、之を

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

愚鈍不肖の子にするとも、若くは、絶世一代の人物にすると
も、只だ其所の育て方如何によつて決すると云ふとに爲つた
る場合には、學科として學んだる智識の殆んど効なくして、
必竟、臨機應變の活智活用なくんば、少しの手出しも出來ぬ
とを感ずるであらふ。此時に至つて、單だ、一概に書物に拘
泥し、講義に執着し、學校で耳の端に學んだる通り、之を行
はんとすれば、非常の誤まりを來す、寧しろ學ばざるの優れ
るに若かずと云ふようなとが屢ばある。夫は必竟、活用と云
ふものが無いからである。而して、其の活用の出來ないのは、
出來ないように教へられたからである。活智活才の伸びると
伸びざるとは、主として學校の教へ方にあるとで、もしも教
育の方針にして誤まる時は、書生は只だ偏固究屈の拙著者に
なる許りである。況んや、只だ「飾」の一字を注意として、
物事の見えを善くすると云ふとを眼目とすれば、實力は決し
て發達せぬもので、其書生の活用の才は斷じて伸びぬもので
ある。他日、育兒方の活用を誤まらすものは、其抑も先づ女學
校の教育にありと言はねば成らぬ。

◎左れば、今の如く女學校の多く出來て、女生徒の殖えるは
一の喜こびではあるが、女學の學風が其根本に於て一變し、
「飾」の一段より進んで、「實力」を主とするの段に達せねば、
女學の隆盛として祝するとは出來ぬのである。凡そ、文と質
とは、一つ品の表裏とならねばならぬ。互ひに相反するよう
では不可ぬ。女性には到底、「飾」の一字を全たく取除くとの
出來にくいものであるから、其「實力」に伴なつて飾るの方針
にせねば、好調和が取れぬ。即はち、「實力」の表てが「飾」と
なるようにするので、ツマリ、實力なき婦女子は、其の女た
る品德風采を損するものと見做さるゝようにしたいので、此
輿論流行を起すの初めは、必竟、女學の方針にある。左れば、
女生教育の目的が、先づ實力養成に重きを置き、活用の出
きる様なる活たる智慧を與ふるとを主とするように致したい
ものである。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

繼母難

◎繼父の難きは、繼母の難きに劣らぬ事であらふが、抑も其の難義が主として家庭の内に起るからして、繼母の困しみは亦た格別である。既に、マヽ母と云ふ名は世の大問題であるが、マヽ父と云ふとは餘り聞かぬようである。人世の最大恨事たる此の衝突が、特り女の上にのみ甚だしく破裂すると云ふは、眞とに氣の毒の事である。

◎繼母と云へば直ちに種々の惡連想を起す。鬼と云へばスグ閻魔の事が思ひ出さるゝが、繼母と云ふても何か宜しからぬものがチキ其次に現はれて來そうに感ぜられる。繼母の頭まに角が生えて居るではなし、口から火焔を吐くでもないが、何んとなく惡鬼に近くて、其の叔母さん位ひでもあらふかと人の容易すく思ひ易いのは何故であらふ。

◎元より繼母として迎へる程なれば、一層詮義の上に詮義をするに相違ない。アレは氣立が善いとか、邪推が無いとか、容貌が惡るい代りに至つて信切であるとか、生れ付き子ボンノウであるとか、出もどりではあるが中々困苦して能く酸甘を心得て居るとか云ふような類で、必らずや尋常婦人に優れた所があると云ふので繼母に迎へるのである。苟しくも繼母に迎へて先妻の忘れ形見を托しようと云ふほどのものが、美貌に迷ひ、風采に溺れるなど云ふとのあるべきでない。萬一、左樣な若氣の至りで、撰擇を誤まり、不適當な後妻を娶つたからして風波を起すと云ふようでは、其罪寧ろ男子にあるのである。然るに、呉々も注意して之ならばと思ふものを娶り、行くものも能々心得て立派に勤め上る積りでも、大抵結果の宜しくないのは如何の譯である乎。扨て／＼苦々しいとである。

◎良人たるものは、其の後妻に對して深く氣の毒に思ふて居るに相違ない。他の家に來ると云へば、何事もなくてさへ隨分辛いものであるに、我が腹を痛めたでもない人の子の面倒を見て、十二分に世話をしても彼此と言はるゝと云ふは、眞とに氣の毒千万の事であると思ふに相違ない。左すれば、自

から我慢も出來、萬事につけて優しくなる譯だ。下々で言へば、先には水も酌まなかつた亭主が、水は己が酌まふと云ふようになる。着物や、出這入の事にも、成るべく、手をかけぬと云ふように成るに違いないのである。良人たるものは既に之れ丈けの用心をして、亭主關白の位ひと已惚れたものでも、一二段、位ひを下げて、温和しく、遠慮をすると云ふように成るのである。

左らば、後妻其人は如何んと言ふに、固よりナミ大抵の決心では無い。何れ甘んじて繼母とならふと云ふほどであるから、非常に其良人たる人を信愛して、其の寂寥に同情を表し、進んで艱難の責めを分たうと云ふの決心か、もしくは其身從來不仕合せにして、人間の憂さ辛さを嚙み分け、ドンナ所ろでも辛抱して立派に女の道を立ようと云ふ決心か、若くは一種の教育的熱心、又は一種の義俠心で、毅然たる女丈夫の心意氣から決心したか、何れにせよ、尋常一樣の思案では無いのである。左らば、繼母となつて、樂をしようの、初めから、人の子をイヂメにゆかふの、わざ〳〵一家一門を騒かしに行ふなどと云ふ馬鹿氣た考のないのは勿論である。有るが上にも働らき、無きが上にも辛棒し、身を粉にしても切度やり通すと云ふ程な覺悟は必らず多少抱いて居るのである。其の志や、誠とに殊勝で、凡そ婚姻の中、かゝる婚姻ほど、高潔で凛々しい婚姻は少ないのである。左すれば、女に起り易き我儘とか、吝りとか云ふようなことは、先づ此の向には少ない譯で、申さば、家庭の爲めには至極健全な元素が滿ちて居ると云ふて宜しいのである。

◎ソコデ、後妻が初めて先妻の子を我子とした時の感覺は如何であらふかと云ふに、無論、愉快で、うれしくて、至つて心嬉しいに相違ないのである。赤の他人でさへ、我を慕ふものは可愛ゆくなる、まして夫が子供であれば尚更ら可愛ゆくなる。之は、人の生んだ子供ではあるが、今日より妾の子供となるのである、一生親子の緣を結ぶのであると思ふて、アチラから、お母さんと言つて懷いて來る時などは、未だ子供を持つたとの無い婦人ならば、何んだか珍らしいような、うれしいような感じがして、俄かに母親めいた心持が湧て來る。もしも、前に子供を持つたとのある婦人ならば、忽まち當年の事を思ひ起して涙が出る、先妻の心中を察して脳に切

まる、ロ、は女の情合ひで、至つて優しいものである。眞とに此の初對面の時ほど、繼母繼子の間の麗はしいとはないのである。子供も、御母さんが出來たと言つて大悦こびて、之からは世間に出ても、肩身が廣いと云ふやうに思ふ。眞とに後妻の初枕の夜は、婦人の老すると更に十年で、如何に年若き女子なりとも、たゞ〳〵子供の事より外に夢に見るものでない。其頃は、反つて男子たる野郎の方が浮氣であると言ふても宜しいのである。

◎扨て、良人たる者の心得と云ひ、後妻たるものゝ覺悟と云ひ、無邪氣なる子供のなつき方と云ひ、彼等當初の圓熟と云ひ、總べて一家圓滿の吉相で、駘蕩たる春風の正さに東がしより吹き初めたる光景である。如何なれば、この麗はしき出帆よりして、暴風怒濤の苦海に近づくとであらうか、眞に不思議と云ふより外にないのである。

◎因つて、如何なる暗礁が是れ衝突の初めであるかと考へるに、總じて『廻り氣』と云ふものに歸するのである。左らば、誰が第一に『廻り氣』をするのかと言へば、誰と云つて定まりはせぬ、すべて皆ンナがお互ひに初めるのである。誰が惡るいのでもない、お互いの廻り合せが惡るいのである。

◎物は忘れて仕舞ふと何の痕跡も遺さぬものだが、意地惡るく忘れられず、フイ〳〵心に浮んで來て、氣を惡るくするほど嫌なものはない。繼母の一家の事は即はち此の狀態である。世人の批評でも、亭主の小言でも、母親の一とにらみでも、子供のワルサでも、すべて其時一時の事となつて消散して仕舞へば濟むのであるが、中々容易に忘れられぬ。蛇が鎌首をもたげる如く、屢ば回顧追懷せられて、その都度、惡氣を吹起すので、之が抑そも家庭亂の根本である。

◎先づ、近處、近邊、親戚、一門などの批評からして事を起して來るのが順序である。彼等八方の批評家は、善きにつけ惡しきにつけ、何事かの批評をする。するなと言つても、目と口とがあれば是非するもので、其上に耳があるから、中々流傳が早いのである。況んや、彼等は皆な一種の心切氣があつて、多少彼此と心配をして居る。繼母の子が、チチむさい姿をすれば、何と云ふ構はないとであらふかと言ふ。美くしい姿をすれば、締りが思ひやられると云ふ。がつ〳〵すれば食物が足らのぬであらうと云ふ。餘計に食べて胃でも惡るく

すると、人の子だから世話が焼かぬと云ふ。止せば善いに、色々とお母さんの事を聞て見る。今度のお母さんは、可愛がつて呉れるかと問ふのが、抑々もの初めである。子供の頑是ない答へが、善ければ善いにつけ、嚴しく言いつけてあると思ひ、悪るければ悪るいにつけ、切りと氣の毒がるのである。夫より、ソット物をやり、馳走を食べさせなどして、内に歸つても、黙つて居るのだよなどゝ教へたるが、後に大波瀾を生ずるの基みとなる。すべて、近所界隈の人々も悪意ありて爲るとにはあらず、皆是れ心切の好意より爲るとなれども、結果は偶然にも皆な悪るくなる者である。況んや、親類一門の徒、何れも親となり、母となりて多少世話に關係せるものゆへ、其邊の思惑なきにあらねど、母親の行違より大波瀾を引起し、所謂る灰吹より蛇の出るような騒ぎを生ずる其の根本は、ツマリ何人の悪しきにもあらず、たゞお互ひに一寸り氣ーと云ふものに取付かれたるの致す所である。良人もまた其の通りで、成べく自分に親しまぬようにさせ、何事でも母の方に親ませるようにするが、抑そも疎遠の端である。左ありとも、良人は常に出あるく者ゆへ、子供は自から之になつく、之は珍らしいからである。然し、良人の心には、ソウとは感ぜぬ。其の両親の時でさへ、子供は、父親の外出するときに後を追ふともあるが、其時は、結句、笑の種となり、母も反つて之を話して人に誇るほどであるが、繼母の家では、此等の現象が異様に解釈される。お母サンにお頼みなさいと言つても、小供がシク／＼して、お父サン、お母サンに頼んで御数ョ、などと云ふともある。之もまた生みの二親の時にさへあるとだが、父親の心には左様とは感じられぬ。夫故、父親はソザト大聲で叱るともあるが、其叱るのが一層異様に聞えるから、繼母は自分を叱られるような廻り氣を起す。父親に叱られて、子供がシク／＼泣きでもすると、父親の心に十分無量の悶かしさが起つて來るから、自づと其の聲もふるえ、所によると、睨んだ眼中に慈愛無限の光りを放つ。其處は血を分るの現象である。茲に是れ家庭が芝居同様で、人情義理のもつれ合となり、敵が味方で、味方が敵で、撫でる手の中に針を立てゝ叩く本心に涙の露をうるほすと云ふようでは、イヤハヤ、家庭は、千両役者の大舞臺で、見物一同、涙を飲み込むより外はないのである。

一〇

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎繼母が本來の決心は前に言ふた通りである、元と尋常一樣の覺悟で來たのでは無い。然し、日夜些細の出來事が、一年三百六十五日の日々夜々に、何百回と起り來る其都度には、中々大決心も暫し盈ることがある夫は最もなとである。良夫が遠慮をされゝば、初めはお氣の毒にもあるが、亦た怨めしくもある。斯程、心を御付け遊ばすかと。いぢらしく思ふ心の下より、左りとて、妾を妾とも思し召さぬかと嘆かるゝともある。四方八方の批評に對して、吾良人こそは何んとも動き玉ふまじと信じつゝも、亦た疑がひ玉ふ樣にも見へる。第一、氣兼して打あけ玉はざるが、甚はだ氣遣はしく感ぜられる。夫より次第に心ぼそくなり、何れに向つて訴へるとも出來ず、天地間に吾一人を友として、後には吾一人の影にさへ心を留くようになる。實家に言はんにも、實家には他人が混つて居る。良人に申さんにも、お氣の毒に堪へられぬとがある。友達に言はんにも、迚も同情を受られるものでない。切めても紙にでも書きたけれど、夫も人に見らるゝ恐れがある。抑そも、天地間の何處に向つて吾が訴へ所を得ようかと、寂寞不聊の感に堪へぬのであらふ。よし又、後に吾が實子が出來たりとも、夫は一層苦痛を増すのみで、吾子と先妻の子との間だを程好くさせるのは、亦一大困難の事業である。殆んど其心の休まる所とては無い。我子が立身して、先づ其家に落付く頃にでもなれば、少しは安心と云ふようなものゝ、其頃は早や息子のヨメが出來て、又々一心配の種である。況んや、吾子が先妻の子よりも立身すれば又一心配、立身せずば又心配、吾娘と、先妻の娘との片付先の比較も亦一大苦勞、其の落付工合も同一の苦勞、其の孫の躾方の比較も亦た大苦勞である。徹頭徹尾、痛苦慘憺の一生涯にあるものと言はねば成らぬ。

◎就中、繼母にとつて氣の毒なるは、人々が主として繼母のみに責を歸するの一事である。繼母の家の不折合の時には、誰を責めるよりも先づ繼母を責める。アレは繼母だからだと言ふのが、萬口同一の鐵案である。何故あつて、斯く繼母にのみ、責を歸するか。世上、繼母に同情を表するものは至つて尠なく、繼母と云へば、既に慘酷に生れついたものゝ樣に考へるのが、通常の習はせである。吾儕の思ふには、繼母は献身的に婚姻したものはなく、又、繼母ほど苦勞するヨメ

はない。もしも先妻が草葉の陰から其の實相を眺めたならば、定めし感謝して其の好意を喜こぶであらふに、惜しい哉、現世の人間たゞ物の虚相に迷ひ、徒らに難きを人に求めて、いよ／＼人の困苦を増させると云ふは、與に嘆かわしいことである。

◎然し、當代の繼母はマダ／＼樂なものである、之は文明のお蔭とでも言ふのであらふ。昔し、封建の世にあつて、家住居を移すよ難く、代々同一の所に住居して、向ふ三軒、兩隣り、五軒十軒の組合、親族一門の交際、出入子方奉公人に至る迄で、總べて變化なき時世にあつては、後妻たるものは、唯一人、此の万目に睨まれに來るのである。然るに、今の時世は、往來轉居勝手放題で、江戸の人が長崎に移り、出羽奥州の人が神田ッ子の真中に這入るとなどは通常の事で、もし夫が出來れば、仙臺に本宅を置て、別莊は須摩明石に建てゝも好い。左すれば、後妻たる人の苦勞と云ふものは、百の内の九十迄は減ると云ふものである。之を昔しに較べて見れば大相の相違である。昔しの後妻たり繼母たる人が如何に非常の苦勞を爲したか、其の一生は只だ血の涙であつたらふと思ふにつけて、今の繼母たるものは、ちと文明の餘澤に向つて感謝し、且つは、先人の痛苦を忍んで、自から多少慰さむる所があつて然るべきである。

◎左りながら、大體に於て、繼母難は實に難中の難である。之は誰が起すのでもない、誰が惡るいと云ふのでもない。お互ひの廻り氣から起るのだとした所ろが、此の廻り氣は何うしても起り易いもので、又誰を責めるとも出來ぬ。もし誰が惡るいと言つて強いて其の責を尋ぬれば、ツマリ「運が惡い」とでも言ふの外はない。左すれば、繼母に關係ある人々は、抑そも何人をも責めることは出來ぬものだと覺悟し、必竟は、皆ンナの運が惡るいのだと承知して、唯一人誰と云ふ人にも責をきせぬようにするが善い。而シテ、其の中の惡まれものとなつて、第一に人の口の端にかゝるものは、繼母其人であるから、中に於て繼母が第一に六かしいものであると云ふとが、分つたらば、少しは衝突が減るであらふ。繼母難を救ふに色々の手段もある。追々愚考を述べようとも思つて居るが、先づ第一に此の根本の道理を承知するが最初の事であると思ふのである。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

内辨慶

◎内辨慶、又の名を巨燵辨慶と號す。只だ家内の櫓に立こもり、内の中でのみ七ッ道具を振まはすの故である。此の豪傑、外に出でては至極温厚篤實で宛がら君子の風であるが、家に歸ると俄かに英雄となり、恰かも警視總監の役でも勤める如き氣色である。其口八釜しさ、到底、風下には居られぬほどの次第である。

◎斯る英雄の心を收攬し、其の氣に適ふように内助して行くのは、中々困難である。良人たるものは外に出がちで、家に居るの時間が少ないゆへ、一刻にても長く家に安息し給へと祈るが、すべての妻の眞情であるに、此の内辨慶の君のみは、内に居られる時が人々の迷惑ゆへ、ちと外にお出ましあれば善いになどゝ、蔭でウワサされるようになる。外に出られるのも容易の事でなく、着物を着ること、十本位の手助けがなくては出來ず、玄關の下駄の直し方でさへ、幾何學的の智識が入用なほどで、兎に角、門迄で、車を引出す調子が、餘程六かしい。浮かりすると歸つて來られる。然し、門を一つ、くゞると忽ち温厚篤實になり、言ひたいこともチット辛棒される。而して其の辛棒したとは、家に歸つて破裂されると云ふ躰裁である。夫故、先づお留守の内が、家内中で樂々すると云ふ、成るたけお歸りが晩ければ善いとウワサされると云ふ、不都合千万の事である。

◎抑そも、斯様な質の男子は、一躰は好人物である。外で鬱積したるを内で漏らし、外で辛棒したるを内で伸すと云ふ丈けの事ゆへ、御自分でも實は内々悪るいと思つて居られるともあるのである。夫故、家にある人々は、よく之を慰さめ、鬱積した電氣を快散させ申すように仕へねば成らぬ。内助者たる妻の覺悟は固より申す迄もないとであるが、苟くも妻としては、單に其の鬱積をお霽らさせ申す斗りでなく、進んで追々斯る内氣の氣質を矯正し、家庭に於ても亦た凛然たる丈夫たらしめ、下男下女の上にも威嚴あらしめるように内助せねばならぬとである。

◎就ては、其の内助の心得となるべき一つ二つを申して見よふならば、

第一、妻は快活に、俊敏に、ちと構はぬ氣に扱かはねば成ら

ぬ。物の言ひ方迄で、竹を割つたる風に心地よくするが善い。もし諧謔に長じて、ちと面白ろく、にぎやかにする様であれは何更ら宜しいのである。然し、斯様な男子に限つて、中々氣が付いて、批評眼の長けて居るから、妻は何處迄も柔順優美の態を失なつてはならぬ。元來、外に出て少し負け氣味の所から、言ひたいことも言はんで歸るのが癖だし、いつも己が第一等の事を十分に仕たと思つて歸るとが無いのであるから、妻迄が男らしくて、何か自分を侮蔑せぬと云ふように見ゆる形跡があると、直ちにまた不快の念禁じがたくなるものであるから、前に申す如くに竹を割るような氣性を見せても、其竹は女竹で、豆腐を切るように軟らかく心地よく割ると云ふ手心でなければ成らぬ。夫は甚だ六かしいと言ふ人もあらふが、夫婦たるものゝ中では、少し注意をすれば、此の手心を自得するに易々たるとである。

第二には、外から歸つて來た歸り端が甚だ大切である。一とつ、もつれると中々六かしい。之はステル人の癖で、ステタ當人も、内心困却してどつちへも身動きが出來ぬようになるのである。夫故、朝は起きたて、宵は出かけ、外出の時は其の歸りがけと云ふような、總じて、變り目の機端に、機先を制して、爽快にさせる工夫を誤まつては成らぬ。若し此の機先を制せられる時は、氣重の人も浮かれ出し、口重の人もシヤベリ出し、腰重の人も飛出すと云ふようになるもので、氣の變化と云ふものは、實に妙なものである。

○然し此等の事は、未だ其の折々の扱かひ方と云ふべきであるが、更に其の癖を直す工夫は。妻が同行して外に散歩すると云ふ習慣をつくるのが、一の矯正方である。家内で威張り、家外で收縮して詐り居ると、犬が啣やつて行て、外に出るとを一圖に嫌ふのと同様である。之に反し、妻が之に添ふて春花秋月の折節、外に愉快に散歩し、高天廣地の大氣の中に於て、自由に逍遥遊し、而も妻たるもの此傍に居て、些細の事にも注意し、它も不便あらしめぬように調すると習慣となれば、随分と外の運動を好むようになる。此の事が新習慣となれば、嬉しき良人の氣質の轉化するは眞とに奇妙な程である。

○斯様に外に出あるいて樂しまる新習慣をつけると、家に歸つて爽快な顏色をするようになる。此に至つて、家の内で

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の丈夫たらしめる内助をするのである。即はち、下女下男を集め、もしくは小供を集めて、此の良人から、古今の美談、英傑偉人の物語りを聞くと云ふような新習慣を造るのである。而して、何事でも段々に質問として、良人の長所、自信、自任を口づから吐露せしめ、所謂ゆる豪傑風の氣焰を吐くに任せて、家庭の内で自から大丈夫たらしめるようにするのである。此方の効を奏するも亦實に不思議な程である。

◎すべて此等の事が、只だ策となつては太はだ宜しくない。眞との策は、誠と情とから出て、其の結果が自然に策となるようでなければならぬ。以上、一二の注意を申したからとて、固より之で盡たものでなく、亦此丈けでも輕薄の心で行つては、何の甲斐もないとである。總じて、眞心から此邊の手段を考へて御覽なさい。此ようなる活手段が幾つも心に浮んで來べきとである。

楓橫水木巳秋色、寺倚雲巒更晩晴、
煙含遠樹人家遠、雨濕春蒲燕子低。

暗室の女權

女權を擴張すと云ふとは何人も異論なき所なれども扨て其の擴張の方法如何んと云ふとにつきて樣々の見解あり又た物は何程進みても尙ほ其上と云ふがあれば進步の上の進步擴張の上の擴張と云ひて際限はある可らず如何なる時世にありても女權の擴張には不同意なきとあれども實際の程度如何んと顧りみて進步の度合ひを勘辨し時には自から安んじて先づ此れ位ゐならば相當の擴張は出來たるものと滿足せざる可らず左なくんば何時も不滿足々々とて寸時も得意安心の機會はなかるべき也玆に東洋と西洋との女子を比較し其の何れが女權隆んなりやと云ふ問題に對しては何人も西洋の女權を羨やみ東洋の婦女子は奴隷一汎の境界にあり男子に壓制を受けて一に其の自由氣儘の玩弄の下にありと見做すが通例なれども吾人は容易なく其說に服すると能はず抑そも器具奴隷の如き申さば之に戀思愛情の通ぜぬものならば兎に角苟しくも婦女子とありては如何なる蠻野未開の世にありても其の熱情なきはあらず否な開けざる世ほど其の情交は反つて猛烈不容赦な

りと言ふほどなれば如何なる世にありても其の愛情を得んとするの熱望なきはあらず昔し聞けざる世に傾國傾城などの語ありて其の一顰一笑もつて國を傾むけ城を傾むくと評せしほどなり況んや其の身を傾むけ其心を傾むくるものは滔々として多かりしとなるべし既に斯樣に其の愛を得ると熱心すとせば媚び之より起り嫉妬取り之より始まり種々雑多の方案を運らして其の情を專收せんとせしより古來幾多の實例あるよなり此時に當つて之を玩弄物し奴隷視すと云ふの形容詞も亦た適當せざるにはあらねどそは只だ人の品位の徳義上より申せしとにて之を惨酷に待遇せしとの意味より言はば毫も要領を得ざるとなるべし左れば東洋流の婦女子が外に出あるくともなく交際社會の花となるともなく何々夫人と云つて其人同等の待遇を受くるともなき現象を只だ外形より觀察すれば如何にも其女子は冷遇せられて西洋婦人に較ぶべき摂理は毫末もなきようなれど抑そも其の良人たり男子たるものゝ上に及ぼす女子の感化力即はち實際の摂理より之を言はば斯る待遇に縛られて餘り外に出でざる婦人こそ反つて外交的婦人に二三倍する實權を所持すると共に意外の威あるもの也近くは支那朝鮮などにて現に部屋の内にのみ閉居し醫者に診察さするすら快しとせず中には布を垂れて穴を穿ち其穴より手を出して脈を見せ舌を出して色を見せるほどに外部に立出ると嫌ふ婦人多くあり西洋人などの眼より見れば奇怪至極不間千万の樣なれども扨て其の婦人が男子の上に及ぼす實權實力の上より之を言はば勢力の洪大なる共に驚ろくの外なき也左れば支那朝鮮の現状にてはたとひ如何に其の男子の上に彼此と言ふとも内に歸つて何人も近づきがたき暗室の中に夫婦たる二人さしむかひの時の感化力を動かすにあらざれば何たる勧告誘導も所詮其効は見ずとて何れも失望するとふり彼地の實際を知る人の毎度見聞する所ならん蓋し想ふに此れ人情至當の事にて夫婦微妙の關係を味はひたるものは餘り奇怪の出來事とも思ふまじき也左れば朝鮮支那に於ける最大有力の實權は必らずしも役所にあらず交際社會にあらず只だ暗々なる狹き閨室の裏中々他人の近づきかたき閨房の内にありとして竊かに手のつけがたきとを苦悶する所ろ也夫れ女權と云ふものゝ行はるる摸樣は大抵左樣の關係なれば單に女權を擴張すと叫びまはり女子が外部に於て勢力を現はすとなきゆへ女權を

なきものと速了し女子が男子に壓制せらるが如く見ゆる故に女權はなきものと誤解するは大いに可笑しきと也此邊西洋人の速了誤解はまだしもなれど東洋の事情を知るべき日本人が之と同樣の間違をするは恥づべきとゝ言ふべし左れども吾人はいつも斯る狀態を善きことに思ひ女は到底暗室の中にて勢力を得るが宜しきと言ふにはあらず其邊に於ては寧ろ極端なる改革說を持する程なれども一躰斯る狀態を論據として一も二もなく東洋には女權なきとのように言ひ做す謬論には同じがたしと云ふ丈けの事なり而して既に所有する丈けの女權は女權として更に擴張の方を講ずるとこそ大贊成なれど先づ其の持てるものを能く勘定し誤まつて其の持てるものすら取らるゝようなる愚を演ず可らずと注意するの主旨なり。……

獨嘯樓主人

日本風景瀟洒の粋を日本の秋となす。植物黃色素の代表者にして而も歐米諸邦に看得ざる公孫樹は葉々黃金を累れ來るなり。獨り植物色素の代表者の日本に多在するのみならず植物紅色素の代表者たる楓樹屬も亦日本國中到る處に普遍す。

史傳

德川氏の勤王

井上次郎

明治御一新の改革が勤王攘夷と云ふ名目にて時めきしゆゑ、一新以前には、勤王と云ふとの無かりしように思ふ人多し。成程、德川氏の政治も、末路には餘弊多く、其本來の主意を沒して只管ら過誤のみ多く行われしかば、單に其の跡を責めて勤王の心掛毫しも無りしように言ひ做すは、一應無理ならぬとなれども、抑そも德川氏の政躰は勤王を以て起り、代々將軍の戒しめ一と方ならず、責を躬から引きて天朝の御迷惑とならざるよう覺悟し、專ばら眞實の忠義を擢んで丶精神殊勝と云ふべきほどなり。尤とも、此は啻に德川氏のみならず、豐臣も織田も亦た同樣にて、其の篤厚他の英雄の比にあらざりし也。左れば要するに、勤王をもて明治時代薩長政府の特色の如くに思ひ做すは、所詮、史の實際を知らぬ僻事なるべし。

德川將軍が、京都に奉つる親獻と云ふとあり。鶴は、將軍親

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

から尻切半天の躰にて擁り、之を上まつる。若は、特選に作りたるを、将軍家沐浴して手づから取わけ、緘手かに自ら封じて之を上まつる。二代将軍が、献納せざる前の稲を誤まつこ口にへれ、吐き出して大不興なりし逸話もあり。何れも京都に献上しての心掛けは殊と厳そかなるものにてありた

徳川氏の此ろ、京都に何程の御入用を呈せしかと云ふに、元と足利氏の時に三千石、豊臣氏の時に七千石なりしを、家康は一萬石と定め奉り、外に、東福門院入内の上には化粧料若干萬石を持参し、三代家光の時、元和九年更に洛外[illegible]一萬石を合せ都合三萬石を上りぬ。

後ち門院御かくれの後は二万石に復せしが、宝暦三年更に一万石を増され、之より御領地は三万石と定まり、其後に於ての金銀を献上するは申す迄もなく、毎年の御入用は固より其都度上まつられし也。

又、仙洞御料などは三千石なりしを、宝永十一年に七千石に於て一万石とせられしとあり、享保十年より除料一万石、第二の院には千石に定められ、其後に金銀若干補足せられたり。外に女院、東宮、中宮、女御等にも、其時々に應じ、別に捧げらる。皇族、摂家以下公家衆の家禄、女中の俸禄もすべて此外なりしが、合算せば高四五十万石に及びたるなるべし。又、御大禮、御造營の如き臨時の御用度は一切別途として呈せらる。

家茂将軍の時、文久三年より四斗俵十五萬俵を貢献し、其翌年より同十五万俵を増献し合せて三十万俵となす。慶應三年より是等をやめ、山城全國の徳川領及び武家の領分知行悉とく貢献す、其高二十餘万石なりと云ふ。此の二十餘万石丈けを今の金に一石十三圓につもり見れば三百万圓にて、當今年々の豫算に一定せる皇室御費と同額なり。

血統を重んず今昔の妙對

竹一子

太古、日本人種が誇な祭、誘なわれて淡路島の邊りに落し、其の孵化せる武甚さ、翻據せる網隙どによりて、火の平原を焼く如く、障礙に御服し、當時先づ占住せし蝦夷人種の徒を掠するや、其の文明、武力量、到底比較すべくもあらず。土蜘蛛、長髄彦の輩より之を見れば、宛然天降の神種の如くな

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

りき。而して、此日本人種も亦た甚はだ自負し、彼等が自ら視て天孫となすや、其の血に一種優等の品にして、輕しく彼等土人の血に混ずべからずとなしき。彼等の子孫互ひに誇りて曰く、吾は天孫の子なりと。如此く其の血統を誇るの習は、土着の蝦夷人等と相別たんとするの自負心より由來せしなるべし。

斯の如くして外來の日本人が、土着の蝦夷人と相混ずまじとなせし血統尊貴の習慣は、後に至りて歐米の夷狄外人と其血を混ずまじとの自負心とはなりぬ。ふる亞米利加に袖をぬらさじとせし貞節は、豐葦原に住なれし土人には嫁がじと言ひし太古の外來氣象より轉化せり。世は不思議なるものぞ。

而して、此の奇妙ながら尙ほ眞面目なる血統尊貴の習慣は、德川氏幕府の時、家格家祿及び士の數一定せし場合に於て、必らずや吾男兒を擧げんとの必要より妾を置くと云ふとも行はれしが、今はウヂ／＼するほど子の多き人も尙ほ、血統を重んずとの意義にて妾を置く。而も其の放埒によりて追々其血を惡しくしつゝあるを知らず。其の不品行によりて、血に惡疾の黴菌を遺傳しつゝあるを思はざる也。是亦奇

文藝

舞踊

古めかしきをいへば、天鈿女命の岩戸神樂より、催馬樂、それから支那より傳來した舞樂など、また下りては、謠曲舞、田樂、今にあるいろ／＼の俗曲舞、さらに新しきは、舶來の舞踏に至るまで、一寸見れば、たゞに藝であるに過ぎない、もとより藝だ。しかしこのいづれの舞でも踊でも、形の藝以外に、多少の意味を自然に備へて來るとを發見するものである。

いかな舞でも、第一に身體をこしらへてかゝらなければ、上達するものでない。先づ、足の踏みかた、手の動かしぶりなどから始めて、總身五體を働かすので、それで仕上たものには、丁度、擊劍家、柔術家などは、體の姿勢がチヤント出來るやうに、一通の身のこしらへが出來るものである。踏り舞によりて、藝以外に利する處とは、即ち此の點である。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

此姿勢を作るといふことが、即ち體育の一要義である。兵卒を教育するに、第一に行ふものは、柔軟體操であるが、これは何が爲めかといふに、即ち兵卒に適したやうに、姿勢を作る爲である。新兵が入營したての時分は、或は背が曲つてゐたり、足が曲つてゐたりするのを、段々と、體操で正して、一年後には、いかな田舍出の樣の悪い體格でも、立派な姿勢をとるやうになる。體育に於ては、堂々たる姿勢を作るといふことを、教育家は必ずや心掛ねばならぬ。

扨て女學校の體育は、いかにすべきといふが、近頃の問題である。學校にては、男生同樣の柔軟體操を課してゐるが、これも必ずしも悪くはない。然る處、また明治女學院及びフェーリス女學校などにては、一種舞踏に近い體操をするが、更に華族女學校にては、西洋流の舞踏と、日本の踊より、考へ出した一種の新式舞を行つてゐる。成程、舞は、人體をしなやかな姿勢に作るものであるから、女學校などの體操に、應用すれば、都合よく、かつ體育の途ともなるが、其中にも、形ばかりに流れて、肝腎な動作進退をよく仕付けずに、五體に調和した姿勢を作り上ぐることを忘れては、何の要もない。

茶の湯の進退、また女禮の如きも、體の姿勢を揃へるのが第二要旨で、其上、運動にもなる。されどこれ等から出來上つた姿勢は恰も上下を着けたやうな體度であるが、舞のは、丁度振袖を着た風である。いづれの姿勢を取るかは、教育者の考へであるが、兎に角に、姿勢を作るといふことを忘れてはならぬ。即ち又男女共に、體育は、姿勢を揃へ、體の風を正しうするのであるといふ方面に重きを置かねばならぬ。

文字と情

文字はもと死物なり、情ありて後、始めて之を活動せしむべし。詩歌の如きは、尤も然り。されば情に通じ、之に熱きものならざれば、迚も有力なる文章詩歌は出來得べくもあらず。近時、文章を作る士女は多けれども、彼等について、尤も遺憾とする處は、其文章の、常に事相の表面を記するに止まりて、痒き處に手の屆かぬことなり。これ即ち、理に奔り、文に馳せて、情に徹するとの乏しきが故なり。

近頃、殊に和文學者の文章ほど面白味の無きはなし。これ彼等は文法に拘泥し、言葉のいひまはしに苦勞して、さて肝要なる、情の働き鈍き故なりと知らる。假令語法に間違のあらんも、情緒の脉々として顯はれる文章ならば、意よく通じて、人を動すと大なり。

由來、情懷なるものは、それ自身に詩歌なり、文章なり。言語文字は、これに衣服を着せる丈の事なり。されば、平素文字に巧ならざる者にも、禁ずる能はざる熱烈の情緒、凝り成して形を取る時には、悠に大詩人、大文章家を凌ぐ程のものゝ出來ることあり。古今の大文章大詩歌といふものは、いづれも詐りなく飾なき情懷を有のまゝに吐き出したるものたらざるはなし。

素より文章詩歌には、修辭法なかるべからず。修辭法は、人をして、容易く、意を會せしむる所以なりと雖も、强ひて、美辭麗語を用ゐるに勞すれば、情これが爲に乾きて、餘韻を殘さゞるに至らん。元來、衷心に情の充ち溢れたるときは、之を外に顯はすに、美辭麗語を假るの遑あらざるものなり。文選の四六文の如きは、美は美なりと雖も、人をして感動せしむるの力に乏し。新古今の歌の、古今に劣るの評あるも、語巧にして、情足らざればなり。宋詩の、唐詩に劣れるも、また然りといふ。韓退之は、文三代の衰を起したるもの、されば、其文の巧妙麗美なる、素よりいふを待たず、去りながら、其傑作と稱せらるゝ、十二郎を祭るの文は、破格破調の文體にして、たゞ有の儘の情に、一の美辭麗句を用ゐざるものなれども、之を讀んで、泣かざるの人はなし。ベンヤンの天路歷程は、アングロ、サクソン俗語の、平易單純なる英語を以て書き綴られたるものなるに、凡そ人の筆に成りしものゝ中にて、此書の如くに、人類を動かしたるものありや。人を感ぜしむると、巧妙なるポープは、平凡なるバーンスに及かず。見るべし、文は美辭に非ずして、至情に在ることを。

東西洋ともに、古今の文士、詩人の、各世に殘したる詩歌文章は多しと雖も、人口に膾炙して、傳稱せらるゝものは、至つて尠し、一人僅に二三、多きも五六あるのみ。いづれも至深の情感の、よく他を動かす類のもののみ。且又、文名の史上に遺れる如き人に非ずして、情致の止むを得ざるに出でたる詠吟、たとへば、歌集に、讀人不知として載せられたる詠吟

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の如きに、却て他にまさるの名歌秀吟あり。孔子をして、思ひ邪なからしめたる、詩経三百篇は、いづれも作家の名を止めざるものなり。大詩人ミルトンをして、千古の絶吟なりと嘆ぜしめたる、詩篇も亦、吟者を詳にせざるもの多きに居るに非ずや。文人情を巧に詠へると、詩歌に優れる、都々逸、端唄の如き俗謡は多くは不文の詩人に成れり　詩文は、畢竟文を貴ばず、情を得るを以て大事なりとす。

雑録

関林子の堀川波の鼓を読む

八濱樹泉

「堀川波の鼓」は宝永四年、近松門左衛門が五十五歳の作にして同年二月、始めて竹本筑後掾が坐にて場に上せしもの、故に其の傑作にはあらざれども、[illegible]にして[illegible]、複雑なる人情を描いて、尚は自然の致を失はざる、蓋し此の作中能に見るところ也。而して「堀川波の鼓」と題せるは、[illegible]の場所の京都堀川なりしが所以、題目に武士を写したる此の作[illegible]

的悲劇曲也。一篇三章の悲戯曲、詳に元禄武士の家庭を描写して、章々句々、人情の機微を穿つ。實に本篇は一種の道徳経也。人間功罪の歴史也。吾人は、功過録としての、泪の鼓を読む。

（一）梗概

● 上之巻（[illegible]）

▲場所　因州城下　父　[illegible]宅

▲年月　宝永[illegible]年　二月[illegible]日午[illegible]

　同　彦九郎女房（[illegible]の書[illegible]）

　同　お[illegible]の[illegible]（[illegible]公）

▲人物　女房　お[illegible]の弟（彦九郎[illegible]子）

　宮地源右衛門　鼓の師匠（新[illegible]）

　[illegible]右衛門　小[illegible]（[illegible]）

● 中之巻（[illegible]入）

▲場所　因州城下　小倉彦九郎宅

▲年月　宝永[illegible]年　五月　日午前

　小倉彦九郎　主人（[illegible]き武士）

　[illegible]　[illegible]（[illegible]武士）

▲人物　ゆら　彦九郎女房（男まさりの[illegible]女房）

　同[illegible]、[illegible]、文六

● 下之巻（敵討）

▲場所　京都堀川　宮地源右衛門宅

▲年月　宝永○年　六月七日（[illegible]）

　源右衛門、彦九郎、文六

▲人物　同断、ゆら、（[illegible]人[illegible]）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

本篇の梗槪を叙せむに、上卷は夫の江戸詰の、留守の仕事の手傳に、宿さがりせる妹の藤を相手に、阿種が想夫戀の連懐、奥の間の鼓の音に、猶も想の募る折から養子の文六が、鼓の師匠源右衛門に初對面の挨拶くだされと云ふを潮に、座敷に出で源右衛門と挨拶の果は文六、源右衛門、阿藤、阿種の四人車座になりての酒盛、阿種やう／＼醉ひけるころ文六は旦那の屋敷へ阿藤は中間の迎ひに、夫／＼所用ありて歸りければ、源右衛門も席を辭して離房に移る。阿種は獨の淋しさに堪へかねて、手酌に心意の憂さを拂ふ頃しも、同役の磯邊床右衛門、潜戸より忍びて白刄をひらめかしながら、不道の戀を遂げんと迫る。阿種、一時のがれの怨言を以て、其の場を遁れんとするを、離房なる源右衛門、鼓を打ち歌に寄せて落ちしめければ、床右衛門は驚き走せ出でつ、阿種は源右衛門の手前を耻ぢ、噂の立たんことを恐れ、源右衛門に取縋りて、言はぬ固の盃を獻しつ酬されつゝ酒と色とに氣も亂れて、誠の戀となりけるこそ、實にうたてかりける仇夢の、覺めて驚く男女の耳に、雷と響とは忠太夫の聲なるに、駭然として周章狼狽、逃げ出る門口に床右衛門、男女の袖を切取りての跡は闇の戀、中卷は萬代の不易國入の、中にも小倉彦九郎は、拔群の加増を給はりつ、錦を着て歸る門口に、妹聟の政山三五平、使を立て、留守の間に孕まれしと承る、土產の印と孕を贈るにつけて阿種は心にこたへ取沙汰の、若しやと其人の方を見れど然あらぬ顔色し、姉と縁切つて夫婦になつてよと、姉聟に取縋りて、阿藤が非道の戀慕、己れ姉の夫に執心かけて道知らずめと、阿種が打擲の笞の下に、是れ妹様自分が彦九郎様に狀を付けて、姉様去て下されと言ふてやつたのは姉孝行と、咲き語らふ折からに、彦九郎が妹のゆら、妻敵を討ぬ兄ならば、用捨せじと長刀とりのべて躍出で、阿種が密通の證據とて二人の袖を投出しければ、阿種も包まず實を語りつ、持佛堂へ參れとの良人の情けを彼の世への土產に、胸押開けて九寸五分、潔ざきに切羽まで刺貫ひて死にけり。下卷は、六月七日の祇園會は、彦九郎が骨肉の四人、堀川なる宮地の家を圍みて、源右衛門を討取るに到る。

（二）　阿種の性格

本篇の主人公は、女房阿種なるべし。而して良人彦九郎、姦夫源右衛門、同役床右衛門、妹聟三五平、阿藤、ゆら、など

の性格は、朦朧として例の類型に過ぎざる也。
阿種の庭訓は奈何と云ふに、父親忠太夫は浪人の小身者にして、酒癖ある婦人物なりしと見ゆれども、母親は之に反して才藝共に勝れ、女紅婦徳の嗜ありて、世に所謂る男まさりの婦人なりしならむ。阿膝諫言の節に、「おいとしや母様の、御臨終の二日前両人を枕の左右、遺言のお詞をよもや忘れはなされまい、其方二人は幼時から女子の道を教へ込、諸書経針糸縫の、道もそれでは恥かゝず第一、女子の嗜みは殿御もつてが大事ぞや、身は親ぞ小身は兄よ嫡よと孝をなせ、外の男と差向ひ顔をも揚て見ぬものぞや、総じて夫の留守のうち男とあらば召使、一門他人おしなべて年寄若いの別てなく、此嗜が悪ければ、四書五経をそらで読む女子でも役に立ぬぞや、此遺言をそち達が、御諸と思ふて忘るゝな」と、想ふに母親の庭訓は、全く女大學的にして其の教育は、厳格なる武士的教育なりしならむ。斯る庭訓を受けし身の、阿種は投分髪の幼時よりませて、起居挨拶も閑雅に、齢と共に才智も勝れ、能く世情に通じて常識に富める婦人となりしかど、父親の性癖を稟けて、後妻から酒を嗜みしかば、「嫡は父御のそんをつぎ後妻から酒を呑む、膝よ母に代りて異見せよ」と、亡き母が遺言せしことを思へば、阿種の酒癖も尋常ならざりしならむ。殊に女性通有の、意志薄弱にして理性よりは、寧ろ感情的の婦人なりしかば、感情の高潮に連れては無識的に、殆んど盲目的に過失を所作しながら、忽ち感情冷却して理性の活動を見るに到らば、直に前非を悔悟反省して懊悩煩悶、果は酒を仰いで沈湎酩酊、心意恍惚と楽境を望みしならむ。
鼓の師匠と初對面の節に、「挨拶さはいゝと〳〵」と、物やはらかで蛇として、姿なら面体なら京のどなたの奥様にも、誰が否とはと、阿種が好の姿を、假に想像の眼もて眺めんに婀娜まる〳〵と色白の仇女房、誰やらの錦絵にもありさうな粉装を凝らしつゝ重たげなる丸髷をがくり〳〵とさせ、眼の働き活き〳〵と、殿も連衆に「何とぞ御師匠様のお世話にて、鼓の一番も稽習はせ、御直の御奉公に出し度との念願にて、連合留守の内なれ共、祖父とが御頼み申されたり、此五月には連合も御供にて帰られん、其時分は一番も拍て父様に聞する様に、一しほ頼みあげます」と、挨拶さはいしと〳〵と、鼓の師匠に口も開かせず演べ立つる、家中評判の洒者な

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

りければ、妹お藤が兩文の條に、尤も姉を呼ぶ時分其方の談合もあつたれ共、縁なければこそ姉と夫婦と定まりて、十何年と云ふ年月を重ね子まで養ひ置たる中と』と、彦九郎が妹を斥けて姉の阿種を娶りしも、鼓の師匠が酒の挨拶に、『拙者も深ふは下されぬが少し御酒を好む故、方々吟味致せ共、是は中々京酒も及びなし、色よし香よし風味よし御亭主樣の御心迄、御懷かしう候』と、阿種の色香を讃めしも、磯邊床右衞門が懸想の條に、『武士の立身振捨て、虚病を構へ願をあげ御國に止まるも、皆君故と思召せ、病氣も虚で虚ならず戀が病のお種樣、假の情のお藥を』と、戀に憂身をやつすのも、家中の濡者と評判さるゝのも、畢竟するに阿種が天稟多情の招くところぞかし。

若し夫れ阿種をして嚴格なる庭訓なく、風俗卑野なる市井の間に生長せしめたらんには、淫奔放逸、夙に浮名を謠はれしならむ。例せば、張物仕事の條に、『彦九郎殿とは樣子ある夫婦故、婚姻の時の嬉しさは譬へん方もなかりしが、小身人の悲しさは隔年のお江戸詰』、妹お藤折檻の條に、『親にも子にも換じと思ふ稚馴染の我夫』と、蓋し彦九郎との中は、結縁の前より既に他眼を忍びて、偶の逢瀬に忍ぶ戀路を辿る情合なりしならむ。想ふに阿種の如き人物は、恰も劇烈なる硝藥の如し、作法習慣の綿布を以て之を包被せば、敢て危險少なしと雖も、若し誤りて他物と激甚に接觸せんか、忽ち情欲の火力は轟然爆發して、爲に金石をも碎くに到る。吾人は、斯る悲劇の主人公に對して、實に同情の念禁ずる能はざる也。

(三) 犯罪の徑路

既に阿種の性格を評論せしかば、尚ほ筆を染めて犯罪の徑路を辿らんかな。阿種は三十前後の武家女房なれども、男まさりの母親に別れしよりは、酒好な、浮氣な父親に養はれて充分に甘やかされ、十七八の娘盛を我儘氣隨の三昧に過しつ、果は稚馴染の彦九郎と契を結びて、頓と浮世の鹽を踏まぬ身の雛嫁。殊に彦九郎とは並々ならぬ戀情合なれば、情緒纒綿、言葉も擧動も甘へがちに、焦れつ戯ひつ、泣きつ笑ひつ、『嫁入の時の嬉しさ』は、譬へん方もなかりしならむ。妹の藤を敵手に、『小身者の悲しさは隔年のお江戸詰、お國に居ては毎日の御登城詰、月に十日の宿直番、夫婦らしうしつぼりと、いつ語らひし夜半もなし、然れども主は侍氣、斯う勉めね

は侍の立身がならぬとて、心づようは言ながら去年六月の江戸立には、又来年の五月にお供して、下るまでは逢れぬぞや無事で居よ、よふ留守せよとの貌つきが、目にちらくと見るやうで、ほんに忘るゝ隙もない、平常戀して居る様で」と、良人の噂を口に絶たぬ位の阿種なれば、嫉妬悋氣の情も尋常ならざりしならむ。宜べなるかな、良人の噂に耽りて、あら嬉しやあれ連合のお歸りぞや、いでく迎に参らふと、走り寄るのを捕へて、「是姉様、エ、正體ない彼は庭の松の木よ、彦九郎様は江戸にじやはいの、氣が狂ふたか」と、妹に嘲おしめられて、「エ、悲な、お腹なんの氣が狂ふぞ」と、言ふに到り・は狂か痴か。顧みるに、阿種の如き貞婦は、神聖なる夫婦の戀愛を解して、單に肉體の戀愛を觀じ、此の戀愛的快樂の外には、殆ど戀愛なしと思ひしなるべし。故に良人彦九郎が留守の間の、孤枕空閨に堪へかねて、アレ聞に鼓の音がある高い聲さつしやるな、しツくを張物においまみ覗ひこふ、浮の師匠の屈米を否職存り、只管叩これーの情に結かきされ逢ひたりしならなき。遂し阿種が不義に陥れる得存の總一點は、天涯の多端にありと思ふは奈何に。

斯る多涙多情の阿種なれば、一子文六が奥より出で、「是申し母じや人、内々御聞なされたる鼓の御師匠、宮地源右衛門様只今稽古も御仕舞なり、次第ながら知人におなりもや」と、言ひけるのを皆まで聞かずに、「オ、然ればく先刻より然うは思ひしかども、張物にしかゝりて遅なはり然らせし」と、襷をといて身繕ひして、紫搦と笑ひながら坐敷に出で、鼓の師匠がお袋と云ひしを氣に懸けて、「母と御師匠へは、彦九郎も私も年寄に附ひ侯が、もと此者は我等が實の弟を。連合養子に致せし」と、初對面の客に向ての挨拶、下女が心得つ酒肴取揃へて出しけるを、「ヲ、是は氣が付た、浪人の爾なればお肴はなくとも、お慰みに一ツ」と、良人の留守の間の酒盛、「否鼓たんくと打ち、ハツく大晴の御酒かな」と師匠が酒の挨拶に、「酒がお氣にいつたならば、一ツ飲つて下さんせ、サアまあひを摑みますよ」と、騒々しくも膝を崩しての酌に、師匠もさるもの、「我は御内儀様には少し御用ひと見翫たり、なれくしきさながらお手元拝見」と、突戻すのを、姉おもひの妹が笑止がりて、「いやく深うは飲

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

られず、殊に此頃あてられて氣色も勝れぬ折柄なれば、姉樣もふ止しやんせ』と、側から止むれば、張合になるが上口の癖。『エイ何言やるお肴もない酒なれば、呑であげるが御馳走』と、得手勝手な理屈をつけて、上口同士の酬けて飲んで、獻して返して、强ひて負けて、抑へて助けて、銚子を更へ酌を改めて、醉も互に廻る頃には、主客の亂も亂れ酒。男は酒量强けれど、流石に女は醉ふて眼元をトロリとさせ、つく／＼師匠の顏を見るに、處々の家中に出入して、世馴れ人馴れて、誠に如才なき師匠氣質。殊に鼓の師匠を渡世の都男なれば、粹を嗜好の伊達姿、然かも人をそらさぬ客扱に焦らされて、なが／＼の孤閨に倦ける身の、などか本性亂れずしてありなむ。蓋し阿種が不義に陷れる徑行の第二步は、遺憾の酒癖にありと思ふは奈何に。

酌む盃と共に日も晩景に及びしかば、妹も文六もそれぞれ主家へ歸りつ、師匠も其の座を退ける後は、阿種ひとり忙然として襟に顏を埋めながら苦しげに、吐息つく／＼思ふ想は、何處の空をや迷ふらむ。『女主人の年若き夫は永の吾妻留守、心愷かに持つ爲と一ッ過する酒好み、亂れぬ顏もほかづきて、重たき頭撫搖や向ふ鏡によせかあり、殿待顏の夕べかな』、醉も過ぎては人の魂をも狂はすもの、阿種は力なげに起ち上りて、鏡臺の鏡に覗きつゝほれ／＼と己が顏を眺めながら、パッと上氣する消魂の艶姿を垣間見て同役の床右衞門、御見舞申すと云ひ／＼潜戸あけて飛び込み、阿種に抱きつきて嫉語喃々、堪へぬ思の丈を口説けども『エ、嫌らしや面倒や』と、振放されし無念さに『よし御承引なきからは、こなたと父で刺違へて、上方に流行る心中と國中に沙汰をさせ、倶に恥を晒さん』と、白刄を拔て胸倉とりどうぞ／＼と威しけるに、女心の誠と思ひて誑さばやと分別しつ、忽ち媚態を粧ひて『扨も嬉しき御心底何しに無下に致すべき、されども父は親の家今戾られては如何なり、明日の夜にても我等が内い、竊と忍んで下されなば、打解けて思ひ晴さう』と、男の脊をトンと痛くないほど叩ひて誑らかしける工合、『謠れ者』と家中評判の、仇女房の本色あらはれて、𢅽啌數回に及ばしむ。庾に常座の言拔に、うま／＼と床右衞門を歸へし者の、無殘やお阿種は『氣も据らず、羞かしや京の客今の荒増聞ゝ給ひ、欺して言ふとはそも知らず心の悲しみ計りかは、家中…

ばいする人の世間の沙汰を如何せん」と、懊悩煩悶。蓋し阿種が不義に陥れる徑行の第三步は、不慮の失言にありと思ふは奈何に。

「胸のたくつき堪へ兼て、下女呼び起し酒の燗、小を開てもふ寝よと獨り酒汲み憂さ慰さ」を、強て忘れんとする折から、師匠の足音に驚きて、「ヤ、是は源右衛門様、お前は那處にお越」と言へば、「イヤ女中計りは遠慮に存じ、態と歸る」と、立ち去る師匠の袖をひかへて遊佐幾言「御沙汰なされて下されな」と、果は手を合せて泣く阿種を尻眼に、「拙者は飽迄致すまひが、錯は袋と外よりの、取沙汰は存ぜぬ」と、冷然袖を振切て出るを縋止めて、「然りとは酷い御詞、御身様も若ひ殿、私も若い女の身、實の斯したと隠ても、隠し藏すは世の情、此分で去せては、私心治付ず」と、涙の顔を摺付けて、「云ふまいとある間めの、ふ取揺してよ」と、已に酒の為に理性の機能を失ひし心は、苦悩悲痛の為に念々狂ひにくるひて胡思亂想「濃ふく盛に丁と献き、つゝと干て又引受、半分呑で酌しければ、源右衛門も膝を進めて、「此は奇らしい、いつけざし」と、押戴ひて呑むのを見て、「コレこな様迚も夫ある者のつけざしを、參るからは罪は同罪、何事も沙汰することはなるまいぞ」と、詰めければ、「いや早や斯る迷惑」と、飛で出るのを抱き止むる刹那、世も人も何も彼も打ち忘れ、「エ、餘り恥知らず扨もしんきな男や」と、兩手を回して男の帶を解きつ、酒と色とに氣も亂れて、不義の罪を犯せしこと、哀と云ふも愚なれ。

蓋し阿種の如きは、神經的感情性の天禀に加ふるに、酒氣の為に精神狂亂して胡思迷想、殆ど盲目的の犯罪なれば、稍や恕すべき點ありと雖も、彼の師匠源右衛門に到りては、決して然らさる也。例せば、阿種と初對面の挨拶、他人の妻と酒盛の献酬、鼓を指て源右衛門を睨し、阿種を焦らす擧動は勿論、阿種に手を握られ、取縋られてわけもなくつけざしを呑まされ、帶を解かされて不義を行ふに到るまで、決して本心を失はざりし也。否な、最初より阿種の色香を戀慕して、己が獸欲を遂げしにあらざる乎。之に反して阿種は千悔萬悟、「其の後は酒に醉、夢現ども わきまへず酒を禁れど常々に、妹が異見を聞入ず我夫ならで一生に、逢へぬ男の肌觸て身を汚したか淺ましや、女の罪の第一にて未來は愚か此世の恥、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

親兄弟まで名を捨る身をいかにせん悲しやな、夢になつてくれよかし』と、咽び上て泣きつ喚きつ。果は我身を悲しみ世を詫びて、自害せんとする條に、『未來の末の後の世まで御惜しみのあるべきに、持佛堂へ參れとは流石馴染の御情、いつの世にかは忘るべき、其の御心を此年月知て愛しき我夫を、そでにしての不義でなし夢見たやうな身の上の』と、毫も人を咎め良人を恨むの心見へざるは、庭訓の預りて力ありしを見るべし。而して天稟の多情と遺傳の洒癖との爲に、不慮の惡緣の刀の銹と消へゆくこと、凄愴悲絶の恨みなれ。殊に彥九郎が妻の死骸に抱附きく\/、『さほど母妹兄嫁を、大切に思ふほどならば、など最前に衣をきせ、尼にせんとて命をばなぜに貰ふてはくれざりし』と、泣き叫びながら骨肉の誰彼を恨みし邊に至ちば、吾人は涙滂沱として禁ずる能はざる也。

（四）　餘論

畢竟するに阿種が犯罪の緣に、前後四樣の因ありと雖も、吾人は最後の一因を以て、尤も主因なりと思ふ。最後の主因とは、即ち犯罪の機會也。若し夫れ、例ひ天稟の多情、遺傳の洒癖、不慮の失言などの犯罪的元因ありしと雖も、最後の機會に逢遇せざりしならば、阿種は敢て不貞の妻とはならざりしならむ。本篇に對する巣林子の意を忖度するに、酒と色との二大勢力の、現世に於て如何に大なる誘惑なるかを描寫せしならむ。噫。忘れても尙ほ恐るべきは、酒と色との慾念かな。語を寄す江湖の兄姉、本篇の物語を觀て、一片の稗史小說と輕ずる勿れ。吾人の運命は描寫せられて、能く斯篇の中に錘む。

時流草語

情究學世歷主人

○雪池福翁の病床日記は、此頃每日第一頭に讀む所ろなり。腦溢血たとひ少しく鎭靜するも、其の後大抵は知るべし。吾輩は此翁をして落碌したるヨヒく\/とならしめ、其の一生の豪骨と多年の才思とをして、世人の憫笑輕嘲の料たらしめ、以て僅かに空骸を遺さしむるに忍びず。其家庭嫡々の人の如何なる樣にも生存あれと祈らるる段、情察するに餘りあるとなれど、斯る珍奇の人の最期は其の惜まれたる花となつ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て散らんとを寧ろ希ふ。古の武士は名馬の老たるを一擊して殺す、其の田圃の内に役使せしむるに忍びざれば也。

○石川舜台　は識見ある役僧ならめど少しく望を掛けし所ろ也。其の退隱以前の執事に幾多の失敗はありしにせよ、其の多少の伎倆を認ためしゆえ也。近日京都監獄教誨師の事件に關しての運動を見るに及び殆んど絶望せんとす。夫れ、監獄教誨に用いらるる僧侶を其の佛教徒なる故と斟酌するは、此れ他日の物議を招く以所と知らずや。若し宗教の用ゐに論ずる所あらんには、舜台たるもの寧ろ此際に於て、其の僧侶たるの故に教誨師たるにあらず、との一事を説明すべきにあらずや。何んぞ迂なる。

○高等教育會議　を以て文政の基礎を立んと試みたる笑ふべき輿論は、日ならずして失望せんと明白なり。余は豫ねて思ひき、文相たるもの彌よ其の會議員を多くし、彌よ輿望に添ひ、以て彌よ其の結果を平凡にし、以て彌よ其の愚を相い制せしめんにはと。到底、近人の改革案なるものは、此等の輩のみ、凡そ政治の緊鎖なるもの、皆此從屬の末によりて得らるべきに非ざるとを忘るべからず。

隨感

○疑信不二

容易く人を信ずるものと、容易に人を信ぜざるものとあり。信ずる方は、育ちの平らかにして氣の穩やかなるに多く、信ぜざる方は、生來逆境にもまれて、世の險わしきを取扱ひに難儀し、度々苦き經驗を嘗めたるものに多し。何れを孰れとして評せんや、評する所ろ、因果の運びに出でず、余は寧ろ其の二つ乍らを同憐せんと欲する也。さりとても、此の世の爲體、人は或る心より見ては如何にも信ずべく、又他の心より見ては、些さかも氣のゆるしがたきものにてある哉。假令ひ脫俗相應の輩なりとも、余は之を一個の人間として、到底不信の心を離せざる所あり。之に反しては、如何に醜怪劣等にして、全世界の忌み爪彈きする族なりとも、余は亦た之を人類の一人として、根柢まで見離し去るとの出來ざる信念あり。一言するに、余は其の人間なるが故に信ぜざる所と、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

更に、其の人間なるが故に信ずる所さへ二つあり、余が心の裏にては截然として二様に感發し、毫しも矛盾せず、甞さかも相犯すとなし。更めて人に失望するともなく、左りとて、人に過信するともなき心地のする也。余は、智者と愚人との懸隔の如何にも太甚しき實例を見たり、又、高潔克己殆んど一世に絶するほどの人と、如何にも我身勝手にして情けなきほど道心の亡びたる人とを見、其の相違の眞に黒白の如くなるを感じたり。然し乍ら、之を以て、人を最後迄で信ずるとをせず、又、最后まで見棄つると能はざる也。余は、情熱の烈火にひとしく、身を殺して熱愛を寄するの人を見たり、戀思楚々、天地一人の外なく、生死たゞ其の戀人の爲めにする佳人の意中を見たり、而して、其の變化いまた驚ろくべく、冷却の存外なる塲合に遭遇せり。然れども之によりて、人に身を棄つる斗りの熱愛あるとを毫も疑はずして、其の如何にも頼母しきとを依然信じ且つ喜こぶと同時に、氷の如き人情の亦之に副ふとを忘れず、而も遂に絶望すると能はざる也。人あり若し汝は冷情の子なりと評しなば、余は之を受けん、更に人あり汝は之れ過信の子なりと評するとも、余は亦た受けん、如何にとなれば余が心中の眞と二様の感覺ありて、常に相反かずして存すれば也。

○闘ひの矛萬人相似たり

試ろみに人の他を評するを聞けよ。其の掛念、心配、詰責、痛罵などする事柄の、奇しくも亦た當の本人によつて行はれつゝあるを見んなり。もし其の双方の互ひに言ふ處ろを等しく聞くとを得るの便りあらば、彼等は殆んど同一の事を以て相責めつゝあるの滑稽を見ん。たゞ微笑して其の賢なげなる言ひ風を聞き、一度び潜思しては、人間の扨ても浅ましきとよと歎かんのみなり。彼の慷慨家は、他の慷慨家によりて慷慨せらるべき元因となり、彼の愛國家は、他の愛國家によりて愛國の理由とせらる。騒々しき人、他の騒々しきを責め、我身勝手の人、他の我身勝手を責め、憫れむべし、人を嘲ける所の人、亦た他の嘲けりの種となりつゝあり。斯の如くして、人の互ひに同一の非を相互ひに譏しつゝあるを見れば、初めは、其の愚に笑ひ、次で、其の頑に怒り、遂に淒然として自から恐怖し、又、悚然として人間の淺薄なるに泣ん、豈

天もし大光を照さば、其の爭ひの如何いや汚れたる、其の陷いるるの如何にや醜くき。吾人たるもの屢ば茲に反省せずして可ならんや。

○啻に初戀のみかは

初戀の單純にして熱烈なるに比べては、世慣れたる人の物思には嘆らぬ心地すと云ふ。其の手綱を絞りて容易すく情馬のあがきを綏べず、控え目、流し目に相手を見て、一心不亂に眞情を寄せず、まつしくらに驅け寄らぬ氣の變はりは、人を思ふと云ふ人に心よからぬ筋なることを勿論なれど、之を以て情話しと云ふ可らず。處女の初戀は、純粹なりといへど、變はりやすし。一と度二た度び、傷けられて想思の構え亦々しき人の熱愛は、粹にして動かず、恨まずして久しきを保べし。夫れ、人間の事物に對し、人の人に對する時、亦た此の無きなからずや。幾度びか辛酸を經て、初めて心を深くし、數たゝび、人間と云ふものに失望もして、而して后ち世事人界に一種の識見を定めたるならずは、其人の所信、所行、途に如何んか變ぜんを知らず、氣遣はしき限り也。

○流に溯て源泉に味はふ

流轉變化の萬物に、一定不變の道を覺り、人事榮枯の盛衰に、不生不滅の究まりを悟る。苟しくも多恨多情にして、日夕の移り變はりに安んじがたき徒らは、遂に物の究極と云ふとに考へ到らずして止むを得るや。花の落ち、月の缺くるすら、憂きものを、生死興廢の跡に鑑みて、遂に其の詮する所を思はざるを得る乎。宗教は、無くして勘辨の出來べきものにはあらず。大凡そ心深く情切なる人の必らずや到着せざるとなきの本領に存す。たゞ世の謂ふ所ろの宗教の區域の如何にも卑近なるによりて、士人此外に存して尚ほ餘地ありなど言ひ做す耳。それ、今の通常言ふ所ろの宗教とは、宗教の用を云ふ、すでに卑近通俗に化して、實際世間の利益となりつゝある方面をのみ指さす。若し溯つて其の本領に入り、無形不動の太元に逆つて、其の尤とも幽玄微妙なる所ろに相語るとをせば、大凡そ世の眞面目の思考、情感に心を寄せつゝある人の心、遂に彼との宗教界內に立入らずして能く安んずるとを得んや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時 文

◎英語會話練習書（英譯之部・和譯之部）長谷川哲二著　春陽堂版

⋯本は美しく、印刷は鮮明なれども、會話書としての價値は十分に認むること能はず、割合に杜撰なりと思はるゝ箇處所々に見受けられたり　日本學生の會話書としては、別趣の工夫あるを要す。

◎町醫者　村井弦齋著　同

醫學校出身の二人町醫者となる、一人は學に乏しくして世才あり、他は世才に欠けて學才あり。前者は繁昌し、後者は振はず。後者爲に田舍に流浪して、田舍大the尽の娘の病を治療してより評判を恢復し、其娘を娶りたるに、後者は遂に失敗して北海道さしへ夜逃けしたりといふ筋。いつもの弦齋風にて、此作者由來突飛なる作學上の工夫を好むことも例の如し。

◎女學文壇雜俎（本誌〆切まで）

◎妾と女子（永井生）　毎日新聞九月廿八日

◎ギヨオテと女性（柏陰淸溪主人）　讀賣新聞月曜附錄週報

◎男女同等を論じて蓄妾問題に及ぶ　六合雜誌第二百十三號

◎亞洲の女子風俗一斑（鈴木光愛）　女子之友第三十號

◎將來の母たる人に望む　女鑑第百六十五號

◎日本の婚緣（ミス、アツセル）　ジヤパン、エヴアンヂリスト第五卷九號

◎女神像（天倪居士）　日本新聞十月五日以後

武夫が命を露と爭ひし　石川依平
あれ野が原に秋風ぞ吹く

庁 士

、慈善事業　英人某あり、百萬金を投じて、同國皇太子妃に托し、倫敦に數ヶ所の飮食店を設け、職工人足をして、安價の食事をなすを得せしむといふ。

◎青森縣の女學　女教員は殆と皆無といふべき姿にて、目下必要に迫られ居れど供給の道なきに困み居れり。爲に來年度よりは、女教員を養成せんとの計畫なりと。また女子教育は頗る劣等の地位に在り、父兄等女子教育の必要を十分認識せず。中には女子を教育すれば、却て有害なりと誤解せるものなきに非ずと。

◎愛知縣の女學生徒の就學は至つて少し。名古屋には就學至つて多し。是は例外なり。名古屋市は女子に華服を纏はし日々遊藝を習はしむるの風あり、教育には餘り熱心せざるなり。

◎山梨縣の女學　女教員は至て缺乏せり。其需用向は頗る多けれども之が供給の道なし、今回師範學校にては女生徒を募集せしに、其結果は良好なれども、中以上の家にては教員となすを恥づる風情ありて、良家の女子は教員とならず。また縣下にては、少しく資産あるものは、女教員を妻とするを好まぬ風一般に行はれ居れり、こは小學女教員は概ね家事に勞働するを厭ふ風あるのみならず、家事向の智識至つて乏しく資産ある家に、小學女教員が嫁ぎしを見れば、入以て登龍門となすに至ると。また甲府市の女生徒は華服を競ふの風あり、頗分東京市にも勝れた裝をなすものあり。

◎女教員の束髮　福岡縣師範學校女子部にては一定の束髮に改めらるゝといふ。

（以上四件教育公報）

◎賣淫百犯以上　東京京橋に三十二歲と四十七歲との二人の女あり。前者は百六十回、後者は百二回の賣淫犯にて捕へられたりと、驚くべし。

◎京名物　京都には遊廓十五ヶ所、貸座敷九百九十五戶、娼妓千五百五十五人、紹介人十八人、藝妓千百四十四人、舞妓六十五人、仲居八百六十三人、子方屋五百九十戶、料理屋四百廿九戶、檢番十一ヶ所なりと。

◎札幌の女髮結　札幌の女結髮は盛に小切手を發行し、盛に得意の競爭をなすと序にいふ北海道新開地の氏神は大抵皇太神宮なりと。

◎羅馬教と米國學生　ハヴアート大學。ペンシルベニア大學、學生中の百分の十は、羅馬教の信者なりと、近來羅馬教の勢力の、米國に行はるゝの一斑を見るべし。

◎米西戰爭の入費　米西戰爭の爲めに米國の消費せる金額は、三億弗、即ち凡そ我が六億圓に逹すと、而して無量なる米國富は此大費用を支拂ふに昨年と一昨年の、收穫に對する小麥の價格が、其前二年間の價格に優ぐるより生する利益金

な負ニヶ月、僅に償ひ得て更に一億〇百萬弗の（即ち大凡我二億〇二百萬圓）を餘すさ云ふ。

（以上［illegible］新聞）

大隈伯の夫人　大隈伯は夫人を尊敬すること至て厚く、大政の方針さへ［illegible］かなき事の外は、夫人の勧説に一任すること多く、夫人もまた自ら任ずること甚だ重く、事毎に伯の相談に與かる。世間者は、早稲田の、女天下（ペチコート、ガヴアメント）などいへど、大隈伯に取りては第一等の細君にて、［illegible］中に在りし、実［illegible］にあらんさ。

政治的夫人　大隈伯以外にては、後藤伯夫人、陸奥伯夫人、中島男夫人、鳩山夫人なるべし、諸夫人おの／＼其特色を有せり。

十二人以下の妻を有する［illegible］、以太利の［illegible］工巧技芸［illegible］するに、十一人以下の妻を有し得べき［illegible］を［illegible］へたりさいふ。

［illegible］論　竹本京子の［illegible］百余人、彼等は悉く学生［illegible］

日本婦人の美　中江兆民氏は曰く日本婦人の美なるものなし、見よ彼等の目は西洋婦人の如き光彩なく、西洋婦人の目を大きたる目なりさいはゞ、日本婦人の目は死者の如しさ。然るにオクスフォルド大学に関係ある紅顔白皙なる紳士、此目は日本に来りて日本婦人を見て曰く、彼等の容貌には愛嬌（ナイス）なりさいふべきものなからず、現に何さなく未だ［illegible］てエキスプレツシヨンなきこそ憾みなれさ。男女の容貌　夫人［illegible］の言に曰く、日本は男子醜にして女子美なるに、西洋は男子美しくして女子醜なり、西洋は男女共に醜にして貴賓［illegible］の間には既に見るが如くなるべく、第一等国文明国は日本［illegible］なりさいふぞか。

古今の学　［illegible］すみかしの時代によりて以［illegible］、［illegible］に名付けて書［illegible］学さいふ、［illegible］もある［illegible］なりけり。（以上［illegible］）

之［illegible］、［illegible］に女学生の［illegible］、最もなる［illegible］最も［illegible］る何［illegible］へさからは定めし［illegible］及其［illegible］の［illegible］なるべからんさい［illegible］し一［illegible］（［illegible］）

［illegible］の［illegible］　本年は昨年に比して凡一割方［illegible］京都さ東京さの好みの相違　［illegible］の内［illegible］にて同じ、何しても東京の方は［illegible］パットを見えませんので、［illegible］ついつ［illegible］なりますが、西京の方は［illegible］を好んで、まづくお金がかゝらないで、派手にパット見えるのを好みます。

［illegible］の色合　日本［illegible］は紅色、肉色、鴇鼠、白茶、心［illegible］なるさにては、［illegible］［illegible］なりさ。まゝ白の結びが［illegible］多くなりたりさ。（以上［illegible］）

［illegible］結び方は［illegible］つくり［illegible］て

頭尻丸く詰り前髪の前切くして奥床しく立つ様にし毛生悪きものは抜毛を多く前髪に加へて其結を直すなど是は結手の手加減一つにあり髷の根は高からず低からず央の中位なるべけれど丸髷の外は割髷根上りの方なるべし丸髷の形はお初形より少しく潰き方流行の模様なり島田は高髷中高潰し結綿等種々あれど令嬢は高髷、商家の娘は中高又は結綿に鹿の子絞々を掛け結方は餘り詰りたるよりもノンビリしたる方多し新婦は年増も若手も一般に流行なれど輪の割長さは下品なりさて以前の流行に復り根持の所巾狭く是に標準の如く毛を被せたるが多し少女向には桃割又は唐人髷など相変らず流行なり外に合結び揚巻など中流以下に多く流行するも、髷の根掛には珊瑚珊瑚樹金等特々あれど此頃は［illegible］元結位なる手絡縮緬の絞り手拭の類にて淡泊のものゝみ多く貿行き丸高尚なりなど言ひ居るものあり［illegible］鹿の子絞り年増にて［illegible］手柄風流れて新紫縮緬の柄方針なせられ足は淡泊を好む者多し其他新嫁島田には淡泊なる花簪にて房のおきの分大流行なりさ。

トンビと東コート　男子用のトンビは昨年来の格好にて専ら吉利型の背品に帯なきものの行はれて色合は紺又は黒の絞類を始さし縞格子紺鼠茶納戸鉢紋など好みに多く地質の甲斐絹無地にて大凡廿圓位くより三十圓前後位ひなるが甲斐絹にても地質好み次第にて三四圓も高くなる可く羅紗紋綸子斜子などを當てたゞ少しも違ひ［illegible］けに三十圓前後は高まる可し東コートは本年は一時に安価にして［illegible］の洋服にても六七圓より相応の品を得らる可く婦人向きの吾妻コートは昨年の流行さほどなく色合は鼠、紺、茶、色物、黒紋縮緬、新しきなれども大［illegible］は黒さ紺さのみ多くして尋常甲斐絹［illegible］にて十六七圓より廿四五圓まで其上は［illegible］にて四五十圓にも上る可く仕立方は［illegible］なる［illegible］もこそ當年の中なる流行なる可く［illegible］は上品なる人よりは［illegible］さかまさかは［illegible］に行はれ二目用形に［illegible］し［illegible］にて昔の男風の合羽仕立なれば［illegible］か［illegible］人には［illegible］合の［illegible］きにはおさしさレプキを好む婦人達には一寸目先き代りて面白く流行懸は［illegible］の丈なる［illegible］仕立なれども人柄には最も適當なる可し。

（以上［illegible］國民新聞）

吉原の［illegible］いづるかはけりの
かげ［illegible］なり秋の夕ぐれ

時報

◎津田、渡邊兩女史　米國デンヴァー市に於て開きたる万國婦人大會に列席したる津田梅子、渡邊筆子の兩女史は、英國有志家の聘によりて、諸國訪問に立寄ることゝなり、其筋よりは、私設英國旅行の序を以て、英國女子教育事項取調を囑托すとの事にて、電報にて在米國滯在中なる兩女史に向け辭令を發したり。英國滯在は五六ヶ月以上に亘るべしとの事なり。

○ウヰラード女史紀念會　在京婦人矯風會員は、九月廿七日午後七時より、神田青年會にて、故ウイラード女史紀念演説會を開きたりと云ふ。

○信州逸尻村の婦人會　信州小縣郡逸尻村にては、小學校教員の勸めに依りて婦人會を起し、去る廿五日同村小學校内に其發會式を擧げしに、會員百餘名の參集あり。職員校長其他教員諸氏の有益なる談話あり、且、餘興遊戯等ありて會員一同大に滿足して退散せしが今後は毎年春秋二季に開會する事に定めたりと云。（信濃新聞）

○婦人懇話會設立　甲府なる山梨縣師範學校女子部教諭小田切福乃子の主唱にて今回婦人懇話會なるものを設立したる由右會員は全校女子部卒業生及び女子にて教育に從事し居る人々の團體にして毎月第一回第一日曜日を以て全校寄宿舍内に會合し、家事上の實習其他有益なる談話をなし、互に智識を交換して、女子の品位を高めんとする目的に出づるものなりと云ふ。但し開會の都度全校長小野恒剛、全教諭佐藤猿太郎の兩氏の臨席を請ひ、修身及び詩經の講話等をなす筈なりと云ふ。（山梨日々新聞）

○北海道婦人會水災救濟會　北海道婦人會、函館各基督教會、同婦人矯風會の諸氏は表題の如き救濟會を函館東濱町三十四番地松下熊槌方に設け、今回の水害に罹りたる同道窮民の爲に、大方慈善家の救恤衣品を募集する由。

○山梨基督教徒臨時救護會　山梨縣今回の水害に關し同縣基督教徒中岩崎保氏以下十數名の諸氏委員となりて、見出の如き會を設け、江湖有志の義捐を勸誘中なりと云ふ。

◎小學校裁縫科講習開始　新潟縣師範學校に於ては、本年九月新潟縣令第六十一號に依り、來十月十八日より凡五ヶ月間、各郡市長の薦舉せる年齡滿十五年以上にして、高等小學校第二學年の課程を卒業せるもの若くは、各郡市長に於て之と同等以上の學力を有すと認むるもの三十八名を募集し、小學校裁縫科教員養成の目的を以て講習開始するよしなるが、聞く處に依れば該講習生は學資補助として一ヶ月三圓六十錢給與を受け修身、讀書、算術、裁縫との科目を講習するものにて、講習完了の上は小學校裁縫科專科准教員資格を有するものなりと云ふ。（高田新聞）

○朝鮮女生の留學　朝鮮京城にて加藤公使夫人等の設立に係る京城婦人會の推撰にて、本年十六才なる同國女子一人明治女學校入學の爲、去月廿三日仁川發の木津川丸にて、今回歸朝を命ぜられたる公使館書記生高島昔八氏に伴はれて來朝したり。

○福島縣三代村の美風　福島縣安積郡三代村は元三論村と稱し來りしが、其三代村の人民協議の上、遂に三論村より分離し、別に從來の三代村と云へる名稱を用ゐて、一村を維持することゝなりしものなるが、目下の村長二瓶貞四郎といへる村治上熱心の聞へあり、備荒貯蓄として凡九十九石四斗五升を貯藏し、一昨年より昨年にかけ耕作不良なるを以て、備荒の一端として毎戸に蓄給籾を貸付せしめ、既に千五百俵の收穫を見るに至りしなど、其用意周到なるのみならず、村内一同申合せ村民一人づゝ交代に、毎朝午前三時三十分を期し大なる、鈴を鳴らして村内を廻り、以て猥りに惰眠を貪る者なきに至らしめ、それより更らに三時間を經たる頃、毎戸に就て就業せざる者の有無を調査せしめ、一朝有事の場合には、投給と共に一定の場所に集合することゝ爲し、又三十年十二月婦人會を組織し毎年二回農事の多忙ならざる時即ち正月徐の二期村内の婦女子は、寺院其他に集合し互に家庭教育家政整理の諸項に就きて研究するなど、實に他村の模範たるべき美風ありと云ふ。（非内日報）

○割烹學校の開校　四條流の庖丁師として、有名なる石井治兵衛氏教授主任となり、日本橋區本町一丁目に割烹學校を設け、昨日其開校式を擧げたり。目的は日常離菜料理より諸祝儀式料理に至るまで速成簡易に教授するあり。授業料は五十錢授業時間は女生徒毎日曜日に午前九時より午後四時まで男生徒は曜日午後一時より九時迄にして既に令孃貴婦人方の入學申込多しといふ。

○板垣内相邸の婦人會　九月八日板垣内相官邸にて婦人會あり。大内青巒氏の講話ありたる由なるが、此會は、内相夫人の發企にて、田中宮相夫人、松田藏相夫人、土方伯夫人、河野農相夫人、岩佐純氏夫人等は、その重立ちたる會員なりといふ、今後は毎月、大内氏を請待して開會するとの由。これは土佐派の婦人會とも申すべきか。

○山形婦人懇和會　元同縣知事押川則吉氏夫人其他の發起に成りたる、同婦人會は官吏紳士諸氏の夫人令孃を會員として、毎月一回相會して、修身衞生家事教育等の講話を聞き相互の親和、婦徳の改良を計るといふ。

○醫科大學の產科往診開始　其の告文左の如し產科往診東京市内に居住の姙婦にして出產時本院に來り診察を受け難き場合に於て往診を請ふときは產科專門の醫員を派して診察せしむ但診察料及凡て其他の費用を要せず

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

臨月の姙婦にして入院を望ふものは醫員に於て診察の上私費若くは施療入院を許す

東京帝國大學醫科大學第一醫院

◎貞婦　羽后國東田川郡狩川村古畑まきは貞節の廉を以て、此程縣知事より金六圓を下賜せられたり。

◎東京府高等女學校長　は田中東京府師範學校長田中敬一氏の臨時兼勤を解かれ、こゝ新潟縣師範學校教諭たりし伊藤貞吉氏新に校長兼教諭に任ぜられたり。

◎富岸の讃　名古屋鍛冶屋町[illegible]（八十六）は自ら白木綿二疋を献り、帝室の御用に献納したき旨を願出たりといふ

◎孝子賞金を受く　埼玉縣北足立郡[illegible]町の久保新三郎と云ふ者は家人の[illegible]ともなるべき孝子なりとて去月廿一日埼玉縣知事より賞金を下賜したり其の表彰文は左の如し

汝性孝順善く母に事へ貧家に生れ初め生れて數月其父を失ひ爾後母在世中兄亦没す偶ま母眼疾を患ひ勞働に堪へず家計困乏如何ともする能はず乃ち幼年の身を以て賃役に從事し母の衣食を供す漸く長ずるに及び獨立營業を營み未だ十年ならざるに自ら亦眼疾に罹り遂に盲するに至る一定の營業を失ひたるに困り爾後按摩術を習得し漸く生計を營み貧苦の中に在りと雖朝夕奉養怠ることなく又日々全く明を喪ひ日を送りて歩行自由ならざるに拘りては或は助け或は負ひて遊苗に赴く等曾て怠らざるなし其の孝行を積むる二十有餘年洵に奇特とす仍て其賞として金若干圓下賜候事

埼玉縣知事[illegible]

丁抹皇后陛下崩御

丁抹王クリスチアン第九世陛下の皇后ルイス陛下には、嚮て老年の為、病床に打臥居られし處、遂に本月一日を以て崩御せられたり。皇后は。獨乙國ヘッセ人民のカッセル伯附ウイルヘルムの女にして、千八百十七年九月七日を以て降誕あり、千八百四十二年五月廿六日入内あり、皇男女六人を擧げ玉へり。第一皇女アレキサンドラ内親王は、英國皇太子の妃とならせ玉ひ、第二皇子ウイルヘルム親王は、現に希臘國王の位に在り、第二皇女マリー、ダグマー内親王は、露國先帝の皇后として、同國現帝の生母にてましますの。皇后齢年八十一歳、上より[illegible]たまふこと一歳なり。両陛下は現今歐州諸君主中の最高齢者の一對にして、おはせしに、今や霊淑儀を喪ひ玉ふ、いたましきかな。

◎清國西太后垂簾の政　清國政府、一大變革を起し、皇帝は、幽屏（自殺としいふ）せられ、西太后二たび攝政となりたまへり。西太后齢六十四、皇帝、[illegible]宗を廢す。

◎瑞典婦人の高等教育　瑞典にては近頃態度が婦人をして、男子と同等に大學に入り込ましめ、同じく學位を得しめむとの運動起りたることあるも、未成功せざるは婦人のために悲むべきことなり、目下瑞典には主としてかゝる運動の指導者とされるは、ヘレナ、ワンゲ夫人なり、夫人は時間金錢を惜まず勞力困苦を厭はず、目役瑞典婦人の位地を高むることに盡力し、傍ら女子文科中學校（フラウェン、ギムナジウム）を建てゝ之が校長たり此學校は即ち男子の大學に入る階梯を為す程度と均しき者にして、男子の大學校階梯門の向うを張れる者なり、然れども瑞典にては右の如く未た廣く大學の門戶を開放せず、又學位を授與せざるを以て此學校を卒りたる後、大學に入り學位を取らんとする者は去りて瑞典の大學に入らざるべからず。

此學校の開かれたるは今より僅々數年前のことにして、拉丁語希臘語につきては四ヶ年の[illegible]あり、此校の女生徒は拉丁文にてシーザー、オヴィット、シセロ、サラストリヴイ、ヴォルギル、タシタス及びホレースを讀み、文法は此年限の間始に讀せられ、希臘語にてはオデッセイ、ゼノフォンの「アナバシス」プレトーの「アポロジー」「プロタゴラス」、ソフォクレースの「アンチゴーン」デモステネスの「オリンシヤック」などを讀み、之が四年間とも作文を課せらる。

此程度にて女子の高等學校といふべきは、ベルリンにある「ヴォクトリヤ、リセウム」なるべし、此學校にては拉丁語希臘語を課せざれども、希臘羅馬の文學に付きて講義を為し、又教育學心理學音樂女子手藝を授く、此専門校はフレデリック皇后陛下の保護の下にありて、アンフォン、コフ夫人之が校長たり大學の教授來りて講義を為し、前記のワンゲ夫人又一週二回獨逸文學と教育學との講義を為す、此校に入る者は年齢十八歳以上ならざるべからず、此校は一個の見識を持したる學にて學位を授與せざる間は之に入ることを許さず。（教育公報）

知るしらぬむかしをかけてあはれなり
世をうちはしの夕月のかげ　　迹月

明治女學校受捐金報告

金貳百圓也	福岡縣	安達仁造君
金百五十圓也	同	貝島太助君
金百圓也	同	平岡浩太郎君
金百圓也	同	許斐鷹介君
金百圓也	同	麻生太吉君
金百圓也	同	安川敬一郎君
金百圓也	同	山本貴三郎君
金百圓也	同	衣笠景徳君
金百圓也	同	谷茂平君
金百圓也	同	飯野双十郎君
金百圓也	同	石野寛平君
金百圓也	同	久良知寅二郎君
金百圓也	同	松本イツナ子君 同 健次郎君

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本 紙數三百二十頁 正價金三十五錢 郵稅[illegible]錢

近代以來の讀書社界を震動し、[illegible]せし[illegible]、數十年、一代の流行を左右して一時年少の子をして盡く小公子の如くならしめんとせしものは、此書原本著者の努力[illegible]り純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、[illegible]り、母に代へたり、貧しきを憐み、小作者を愛撫し、[illegible]て[illegible]由の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐高尚なる、少年固より讀まざる可らず、婦女子人亦讀まざる可らず、賤子女史嘗て其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳、森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上[illegible]とし、賞措かず、嘗て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、[illegible]遂に卷を掩ふる能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を[illegible]にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝより切なり、即ち茲に其遺稿を蒐め、女子が一周忌日に合せ[illegible]として前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は序を題し、郷友松井升氏は[illegible]を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

大賣捌 東京巣鴨村庚申塚 女學雜誌社

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十九日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY